

甘藷の在来品種『元気』『源氏』『七福』 『蔓無源氏』などの調査

元鹿児島県農業試験場大隅支場長 中 馬 克 己

在来品種とは、人工交配によらない品種の総称である。海外または国内の地域間から導入された品種が多い。藩政、明治、大正、昭和初期までは殆ど在来品種が栽培されていた。大正時代に入ると農事試験場で品種改良が始まった。しかし、当時はまだ多くの在来品種を集めて調査し、その中から優れた系統を選び出す「分系育種法」であった。

沖縄県で大正3年(1914)に初めて甘藷の「人工交配」が行われ、これは品種改良の歴史にとっては画期的なことであった。しかしまだ優良な品種は育成されなかった。あの有名な沖縄100号は、昭和9年にやっと育成された品種である。日本内地では、戦後の昭和20年(1945)に、鹿児島県指宿市にあった鹿児島県農事試験場の温泉熱利用育苗圃で人工交配が開始された。その後、22年(1947)に農林省直轄となって発展していった。

明治(1868~1912)、大正(1913~1926)、昭和初期(1927~1945)までの代表的な在来品種は、東日本では太白(吉田)、紅赤、花魁などで、西日本では元気(アイノコ)、源氏、七福、蔓無源氏などであった。昭和15年(1940)頃までは、まだこれらの在来品種が96%を占めていた。元農林水産省農業技術研究所長坂井健吉氏のすすめにより、東日本に対応し、西日本に多い上記品種の来歴について、調査したのでその結果を述べることにする。

I. 元 気 (アイノコ)

1. 来 歴

まず『鳴門市史、中巻』(1982)によって述べる。徳島県里浦村(現鳴門市)の西上国蔵は行商のかたわら開墾に励み農業を行っていた。行商先は本州や九州方面が多かったので、当時の進んだ農業の見聞を大いに高めることができた。

明治11年(1878)当時のある日、撫養(ぶや)港で肥前国大村(長崎県大村)から来た船が甘藷を陸揚げしているのを見て、里浦で栽培している甘藷とは全く異なる形をしていることに気づいた。そこで1貫目(3.75匁)の甘藷を買いとって帰り、その中から優れていると思われるもの3個を選び、これを種藷として苗をとり1畝(1反)の畑で試作を始めた。

その結果、良質多収であることがわかった。試作した中からさらに良質の藷を選抜増殖して、種藷をとり近隣の農家に試作用として提供し奨励した。その結果この品種は良質多収であることは勿論、砂地の旱魃にも非常に強く、収量は在来種に比べて4倍にも達したので、たちまち普及していった。こうして生まれた品種は「アイノコ」と命名された。明治15年(1882)頃から昭和の初期にかけて、鳴門市の甘藷の栽培品種はほとんどアイノコ種が占めていた。

これは当時の「元気」と同系統の品種と言われているが、元気よりはるかに早生良質多収で当地のような海岸砂地帯に適していた。後年大正、昭和の時代になって早熟栽培技術が導入されるようになって、「アイノコ」は食味、品質の優れた点から関西市場でも大いに歓迎され栽培が続けられてきた。なお国蔵は天保11年(1840)に生まれ、明治末年(1912)に72歳で死亡したという。

日本甘藷馬鈴薯株式会社(1948)『さつまいも及びじゃがいもの渡来』にも、西上国蔵が種藪を購入した経過を詳細に記載している。しかし、これは後年の「元気」の祖先であるとし、「アイノコ」(阿以乃古)の品種名は頌徳碑の碑文(後述)にのみに記載されている。さらに、農林省農政局(1943)『甘藷品種図説』、小野田正利(1965)『さつまいもの改良と品種の動向』、坂井健吉(1999)『さつまいも』などには、元気は明治28年(1895)に導入された源氏(後述)の別名としている。

『鳴門市史、中巻』の記述を信ずれば、元気はアイノコと同系統であり、しかも広島に明治28年(1895)に導入された源氏よりも早い、明治11年(1878)に導入されている。同じ在来品種が別々に導入されたのかも知れないが、その真実は明らかではない。

来歴について、農林省農務局編(1937)『雑穀豆類甘藷馬鈴薯耕種要綱』によって付加する。徳島県の部によれば、アイノコは明治25年(1892)頃より栽培されるようになったものである。愛媛県の部では、元気は明治30年(1897)代には栽培されていたようであったが、その詳細は不明である、としている。長崎県の部にも、元気は古くから広く県下に栽培されていたが、その来歴は明らかではない。し

かし、源氏、げんちと称する品種は、元気と同種異名で恐らく源氏すなわち白藪と言われていると考えられる、と記載されている。

さらに、阪神地方で大村藪(筆者注：前掲の西上国蔵が「長崎県大村」から来た船が撫養港で陸揚げしていたという藪ではないか?)と特称して、取引のあった西彼杵郡産の所謂「横瀬藪」(元気種)について、長崎県農事試験場で昭和5年(1930)から純系淘汰を行い、昭和8年(1933)に元気1号の名称で奨励品種に編入した、と記載されている。この記録によればアイノコは元気と同系統であると明言できよう。

長崎県農林センター(1962)『長崎県農業試験場史』によれば、西彼杵郡地方に初めて甘藪が伝わったのは、安政6年(1859)に琉球人が同郡の樺島に漂着したとき、同村の女畿知と言う者が、その船から藪3個を貰って試作繁殖させて、栽培したのが始まりとされている。要するに、甘藪は琉球人がもたらしたものか、また薩摩地方より伝来したものか、と記載されているが、この藪を西上国蔵が撫養港でもらったとすれば、話の理解が容易となる。そして、明治28年(1895)に広島にもたらされた源氏よりも早く、同じ系統が西彼杵郡地方に導入されていたのではあるまいか、と考えられるが確証はない。

2. 頌徳碑

鳴門市史中巻によれば、鳴門町土佐泊浦字福地(現鳴門市)に、国蔵の功績をしのんで大正元年に頌徳碑が建立され永く後世に伝えられている。碑文は下記のとおりである。

西上翁頌徳碑(縦書を横書きとした)

老農西上翁国蔵妙見山下里浦村人後
移居鳴門村大字土佐泊浦居常致力耕

種精千農事為人篤実儉素自守勤勉不
倦暇輒開榛莽以起遺利每鑑察農作物
之適否最用意種苗之選択嘗累年試作
各種甘藷以驗收穫多寡遂能知所謂阿
以乃古者尤適茲土乃勸村民栽培之收
入益饒他郷村亦爭倣此産額頓進世以
為良種未数年播于遠邇郷党皆稱翁曰
甘藷先生之再来今也翁老益豐饒家益
富蓋天非嘉公之功劳以賜此寿富耶頃
日郷党相謀欲醵金建豊碑以伝た不朽
請文於余乃頌曰

阿以乃古 是甘藷王 誰歟選之
西翁国蔵 秋冬之交 累々満場
蔓延郷里 播于四方 恵沢之流
如鳴門之洋 功績之高 似妙見
岡 翁無徳色 郷民何忘 茲鐫
貞民 以配昆陽
大正元年極月中旬 撫養中学校
長 佐藤慎一郎 題字

篠原弥治兵衛 撰兼書

上記の碑文は次のように解説される。

西上翁頌徳碑

老農西上翁国蔵は妙見山の下（した）里浦村の人、後（のち）鳴門村大字土佐泊浦に移居す、居常（普段は）力を耕種に致し農事に精し（くわし）、人となり篤実儉素、自ら勤勉（すなわち）榛莽（しんぼう、やぶの意）を開き、以て遺利（いり）を起こし、毎（つねに）農作物之適否を鑑察し、最も意を種苗の選択に用う、嘗（かつて）累年（毎年）各種の甘藷を試作し、以て收穫の多寡を驗（ためし）、遂に能く所謂（いわゆる）阿以乃古（あいのこ）は尤も茲（この）土に適するを知る。乃（すなわ



西上翁頌徳碑

鳴門市教育委員会 森清治氏 撮影

ち）村民に勧む（すすむ）、栽培の収入益（ますます）饒し（おおし）、他郷村亦（また）争いて此に倣う（ならう）、産額頓（とみ）に進み、世間は以て良種となす、未だ、数年ならずして遠邇（じ、近の意）に播く、郷党皆翁を称して甘藷先生の再来と曰（い）う、今や翁老いてますます豊饒（かくしゃく）家、ますます富む、蓋（けだし）天、公の功劳を嘉（よみして）以てこの寿富を錫（せき）する（賜う）に非ずや、頃日（けいじつ、この頃）郷党相謀り（あいばかり）醵金して豊碑（大きな石碑）を建て、以て不朽に伝えんと欲し、文を余に請う、乃（すなわち）頌（しょう）して（たたえて）曰く、

阿以乃古（あいのこ）これ甘藷王 誰かこれを選ぶ 西翁国蔵なり 秋冬の交（あいだ）累々（るいり）場に満つ 郷里

に蔓延 四方に播く(まく) 恵沢(めぐみ)の流れ 鳴門の洋(なだ)の如し 功績の高き 妙見の岡に似たり 翁、徳色(恩をきせる気持ち)無し 郷民何ぞ忘れん 茲(ここに) 貞民(堅くて美しい石)に鑄(ほりて) 以て昆陽(甘藷)に配す(組みあわす、甘藷らしい土台石の上に碑を建てたという意味か)

大正元年(1912) 極月(12月)中旬 撫養(ぶや)中学校長 佐藤慎一郎 題字 篠原弥治兵衛 撰兼書(撰は文章を書く意)

(元鹿児島純心女子短期大学教授 芳即正氏 解説)

3. 生育特性

農林省農務局編(1937)『雑穀豆類甘藷馬鈴薯耕種要綱』の徳島県の部によれば、アイノコの熟期は中性である。葉形は心臓形でその色は淡緑、蔓の色も淡緑である。藷の形状は短紡錘で大きさは中である。藷の皮色は淡紅で肉質は粉質である。食味はやや上で、貯蔵は容易であった。用途は煮食に適しているとされている。

上記の愛媛県の部に元気について記載されている。茎は長く、太さは中で、色は淡緑である。藷の形状は短紡錘形で大きさは中である。藷の皮色は淡紅で肉色は淡黄で肉質は粉質である。食味は中で、用途は副食、切干し、澱粉用にされた。

さらに、長崎県の部に元気と元気1号の記載が見られる。いずれも、葉形は不完全切葉で黄緑色である。藷形は紡錘で藷の皮色は淡紅で肉色は淡黄である。蔓の長さは中、蔓重は少であった。

アイノコと元気と似ている特性は、藷の皮

色が淡紅、肉質が粉質である点だけであった。資料が不十分のために、両者が同系統か否かは明言出来ないが、来歴の部で説明したように同系統としてよいと思われる。

II. 源氏(三徳藷、元気、げんち)

1. 来歴

まず『広島県安芸郡矢野町史』(現広島市、1961)によって述べる。明治26年(1893)に矢野村の人久保田勇次郎は、契約移民として豪州に渡航し、同地マッカイ村のエーデーカートナーの傭人として農耕に従事した。その時、脚気症にかかったが、傭家が栽培していたイギリス藷と称する甘藷を、常食にして全治することができた。彼はこの甘藷の形状や美味な点から日本での栽培を思い立ち、また、病氣全快の記念の意も含めて、翌27年(1894)種藷数個を矢野に送った。さらに翌28年(1895)7月、帰国に当り同じ種藷を数個持ち帰った。彼は「美味で、作り易く、腐り難い」3点から三徳藷と命名した。その後、栽培が広まるにつれて一般には、その性質や特徴から元気とか源氏と呼ばれるようになったのである。

農林省農政局(1943)『甘藷品種図説』によれば、三徳藷の名称は、現在(昭和18年)広島県安芸郡地方にわずかに知られるのみで、全国的には元気または源氏の両名称で呼ばれている。元気は草勢が旺盛なことにより、源氏は藷の皮色が白色で源氏の旗色に類することから誰かが命名したものが、一般的な名称となったものであろうとされている。

源氏系統は、当時九州、四国、中国地方に広く分布し、全国栽培面積中30%を占める有力な品種であった。永年の栽培中に突然変異が続出し、皮色、型、地上部の形態などの違

ったものが、各地に選抜され名称を変えて広く分布した。関東地方の鹿児島種、愛知県の愛知紅赤、岐阜の金時、鹿児島や宮崎の蔓無源氏、千葉県の立鹿児島などはすべて源氏からの変異種である。なお便利、白便利、赤便利などとも呼ばれる。

広島県(1980)『広島県史近代1』(p.1035)に記載の“移民県広島の位置”の項によれば、明治18年～大正12年(1885～1923)時代は、同県は全国1位の移民県であった。因に2位～3位は熊本県、山口県である。久保田勇次郎はこの契約により移民されたのであった。氏は安政4年(1857)9月4日に生まれ、昭和15年(1940)2月24日に84歳で死亡されたという。

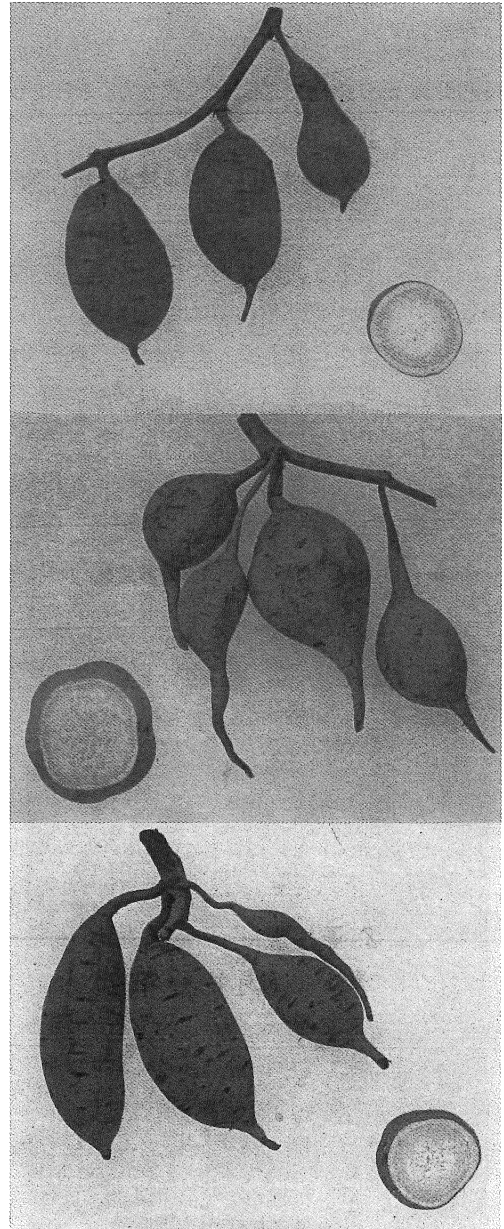
(広島県矢野町(現広島市、1961)『矢野町史』、日本甘藷馬鈴薯株式会社(1948)『さつまいも及びじゃがいもの渡来』、農林省農政局(1943)『甘藷品種図説』、小野田正利(1965)『さつまいもの改良と品種の動向』、坂井健吉(1999)『さつまいも』)

2. 生育特性

萌芽性が良く育苗は容易である。蔓は極めて長く4米以上に達し、地上部の生育は極めて旺盛で、蔓ほけし易い。葉は波状でやや淡緑色である。藷は皮色が淡赤褐色、肉色は黄白色外形は短紡錘形である。藷梗が長く深成りの傾向がある。切干歩合、澱粉歩留が高い。藷の収量は中位で、晩植或いは肥料の適応性が少である。従って早魖や多湿などの気象時には、著しく減収する品種である。一般に温暖な痩せ地に向く。黒斑病に中～弱、ネコブセンチュウには弱い。食味も良いので、澱粉及び食用兼用種として栽培されている。

(農林省農政局(1943)『甘藷品種図説』、小

野田正利(1965)『さつまいもの改良と品種の動向』、坂井健吉(1999)『さつまいも』)



上、源氏 中、七福

下、蔓無源氏

農林省農政局甘藷品種図説より

Ⅲ. 七 福（メリケン白、アメリカ蒔）

1. 来 歴

まず『広島県安芸郡矢野町史』（現広島市、1961）によって述べる。三徳蒔をもたらした久保田勇次郎は、弟吉松と共に明治29年（1896）カナダを経て米国に渡航した。そして、サンフランシスコからやや離れたドライクリーキ、ガイスベル村のバールの傭人として葡萄栽培に従事した。

この時、同家で栽培していたイタリア伝来の甘蒔が、美味で貯蔵に耐えることが、先の三徳蒔より遥かに勝ることを知って、種蒔2個を貰い、明治33年（1900）11月帰国の際、困難をおして密かに持ち帰った。翌年、矢野で栽培したが種蒔が小形のため苗数本を得たのみであったが、一層注意して栽培し、収穫した蒔に七福蒔と命名して、知人その他に分与した。この蒔は他の在来種を遥かにしのぐ優れた性質を持っていたので、次第に近県に伝播した。



甘蒔の碑

広島市 大儀正夫氏 撮影



久保田勇次郎氏夫妻

広島市 大儀正夫氏 複写

七福蒔の名称は①. どんな風土にも適し、②. 作り易く不作なく、③. 貯蔵に耐え、④. まことに美味で常食や料理用に好適で、⑤. イタリア、⑥. アメリカ、⑦. 日本と順次に渡った。ということから命名したのであった。一般には輸入先のアメリカ蒔として通用した。愛媛県農事試験場で試験の結果、七福蒔を優良品種として選抜したので、農商務省は大正14年（1925）3月試作用として七福蒔を各県に配布した。この時この甘蒔をもたらした久保田勇次郎の命名を尊重して、七福蒔の名が正式の名称と定められたのであった。

（広島県矢野町（現広島市、1961）『矢野町史』、水野勉（1938）『亜米利加蒔舶載の由来と之が品質に就いて』、日本甘蒔馬鈴薯株式会社（1948）『さつまいも及びじゃがいもの渡来』、農林省農政局（1943）『甘蒔品種図説』、小野田正利（1965）『さつまいもの改良と品種の動向』、坂井健吉（1999）『さつまいも』）

2. 甘蒔之碑

矢野町史によれば、優れた七福蒔をもたらした久保田勇次郎をたたえ、大正4年（1915）8月有志が發起して矢野町（当時、村、現広島市）の尾崎神社山麓に石碑を建立し同人の功績を記念した。

碑文は下記のとおりである。

甘藷之碑(縦書を横書きとした)
七福芋者一名亜米利加芋明治三十三年本村久保田勇次郎氏従北米合衆國齋婦其味甘美而適常食且耐久蔵寔優舊種是以栽者年加遂至見今日之盛況昔者青木昆陽尽盡力於甘藷之普及世人德焉称甘藷先生久保田氏之功蓋有亜之者矣頃者有志者胥謀建碑為記念囑文於余乃誌其梗概云

矢野村長伊藤富三郎撰併書

裏面に大正4年8月建立とあり、発起人11人の氏名が刻まれている。石碑の高さは1丈2尺6寸である。(約3尺70センチ)。

昭和7年(1932)12月、時の矢野町長奥坊只次郎は、久保田勇次郎の功績に対し記念品を贈って表彰し、降って昭和14年(1939)7月には広島県農会が感謝状と記念品を、また安芸郡農会が表彰状時の記念品を贈って氏の功績をたたえている。

上記の碑文は次のように解説される。

甘藷の碑

七福芋は一名亜米利加(アメリカ)芋、明治33年(1900)本村久保田勇次郎氏、北米合衆国より齋(もたら)し帰る、其の味甘美にして常食に適し、且つ久しく蔵するに適す、寔(まこと)に旧種に優る、是を以て栽(う)る者年に加わり、遂に今日の盛況を見るに至る、昔は青木昆陽力を甘藷の普及に尽くす、世人焉(これ)を徳として、甘藷先生と称す、久保田氏の功蓋(けだ)しこれに亜(つ)ぐもの有り、頃(このごろ)有志の者胥謀(あいはか)り碑を建て記念と為(な)さんとし文を余に囑(しよく)す、乃(すなわち)其の梗概を誌(しる)すと云う。

矢野村長伊藤富三郎撰併びに書

(元鹿児島純心女子短期大学教授 芳即正氏解説)

3. 生育特性

萌芽性は中程度であるが萌芽数がやや少ない。育苗はやや難の部類に属する。蔓は長く2.5m内外で、地上部の繁茂中程度で乾燥地帯に適する。藷は扁平に近い短紡錘形で、外皮は黄白色、肉色は黄色、掘り取り時の肉質は半粉質であるが、貯蔵後は急に粘質となる。切干歩合、澱粉歩留は中位、藷の収量も中位である。さらに晩植、肥料適応性も中位である。黒斑病抵抗性、根瘤線虫には中位であるが根腐線虫には強い。食用品種で、貯蔵性が良い。関東地方の太白と同様に、一般に農家の自家用として栽培されることが多い。交配



上、久保田家の寄せ墓

下、久保田勇次郎氏の墓碑

広島市 大儀正夫氏 撮影

母本として多く用いられた品種である。

(農林省農政局(1943)『甘藷品種図説』、小野田正利(1965)『さつまいもの改良と品種の動向』、坂井健吉(1999)『さつまいも』)

IV. 蔓無源氏(蔓無げんち)

1. 来 歴

この品種の栽培は、明治40年(1907)頃、鹿児島県垂水町(現垂水市)中馬磯助(甘藷品種図説では中島と誤記)が自家圃場の源氏の蔓返し作業中に、蔓が短大で葉の着生が密生した株を発見して増殖したことに始まった。

当時の様子を磯助の息子一平の嫁のイネが話している。蔓返しの作業のために、落畑に入ると畦の上に竹の棒が立て、落蔓の切れはしが結び付けてあった。その理由を磯助に聞いたら、それは蔓が変化した甘藷(からいも)の印であると説明した。普通は蔓が4尺以上もあるのに、これは1.5尺内外であった。その株は3株だったように思うと話している。磯助は息子の一平、吉蔵、イネらに、この蔓の藷が当り前に収穫できたらすばらしい事である、すなわち、炎天下の蔓返し作業から解放

される事になると話した。

(蔓返しは、昭和初期から効果のないことが分り実施しなくなった)

その印の甘藷の収穫量は他よりも多かったのもので、翌年これを種藷

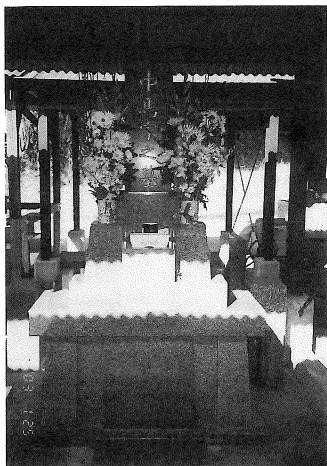
にして栽培したところ、すべての甘藷の蔓が短く蔓返しをする必要がなく、収量も1~2割多かった。明治44年(1911)初めはヤンボシイモ(ぼうずいもの意)、やがて長男の一平の名を取ってイッペイイモとも呼ばれた。後年、蔓無源氏または蔓無げんちと呼ばれるようになった。氏は弘化元年(1844)8月28日に生まれ、大正6年(1917)4月23日に73才で死亡されたという。

鹿児島県農事試験場で大正9年(1920)から品種比較試験を行った結果、昭和3年(1928)より、宮崎県では昭和4年(1929)より奨励品種に編入された。南九州ではこの品種が大部分を占めた。なお、源氏の鹿児島県への導入は、明治30年(1897)頃北九州地方より移入されたもののようであるとされている。

(鹿児島県農事試験場(1963)『鹿児島県農試業績集、創立60周年記念事業』、農林省農務局編(1937)鹿児島県『雑穀豆類甘藷馬鈴薯耕種要綱』、南日本新聞昭和39年(1964)4月16日『からいも特集27』、農林省農政局(1943)『甘藷品種図説』、小野田正利(1965)『さつまいもの改良と品種の動向』、坂井健吉(1999)『さつまいも』)

2. 生育特性

萌芽良好で萌芽数も多く育苗は容易である。蔓の長さは1.5尺内外で、生育は旺盛である。葉は源氏と大差なく、葉柄がやや細長である。藷は外皮が淡赤褐色で皮目が大きい特徴がある。形は紡錘形であるが、九州地方ではやや短紡錘形となり易い。肉色は黄白で質は硬い。切干歩合37~40%、澱粉歩留23~25%でいずれも高い。在来品種中最も澱粉含量が高い。高澱粉品種の多くは、この品種の遺伝子に由



中馬家の寄せ墓

来している。食味が良好で、澱粉原料、食用兼用種である。蒔収量は九州地方で源氏に比べて約10%多い。晩植適応性、肥料に対する適応性も源氏よりやや大きい。他の点は一般に源氏と全く同様である。

(農林省農政局(1943)『甘藷品種図説』、小野田正利(1965)『さつまいもの改良と品種の動向』、坂井健吉(1999)『さつまいも』)

V. 普及状況

大正時代から昭和初期の統計数値は、残念ながら全く見当らなかったが、農林省農務局編(1937)の資料により昭和11年(1936)について整理した(表1)。

アイノコの品種名の記載は徳島県のみであったが、アイノコ、元気、源氏が同系統とすれば、島根、広島、熊本、宮崎各県の他は、全てに食用兼澱粉用のアイノコ系統の栽培が50%を越えている。食用の七福は島根、広島、熊本の各県が30~40%で、他は15~20%であったが、高知、長崎の各県は2~8%の低い栽培状況であった。宮崎県には栽培が見られていないが、その他の品種が62%と高いので、その中に含まれていると思われる。なお、源氏系統と七福の合計では、徳島、宮崎県を除いて、およそ各県ともに70%前後の高い栽培が見られている。

九州地方における戦前の主要な在来品種の普及状況は表2の通りである。

戦前の甘藷は大部分が食用であった。食味の良い在来品種が多く栽培されていた。当時の育成品種には、すでに沖縄100号や護国蒔などがあったが、まだ普及は進まなかった。

表1 西日本各県の主要な在来品種の普及状況(昭和11年、単位%)

品種/県	島根県	岡山県	広島県	徳島県	愛媛県	高知県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県
アイノコ	—	—	—	20	—	—	—	—	—	—	—
元 気	—	—	—	—	50	—	57	—	—	—	—
源 氏	15	60	40	30	—	58	—	40	50	38	55
七 福	40	20	30	—	20	8	2	30	20	—	15
その他	45	20	30	50	30	34	41	30	30	62	30

(農林省農務局編(1937)雑穀豆類甘藷馬鈴薯耕種要綱の島根、岡山、広島、徳島、愛媛、高知、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島各県の部による。福岡、佐賀県の数値の記載はなかった。なお昭和12年発行であるが統計は11年と推定した)

鹿児島、宮崎の南九州や長崎県などでは、澱粉用の源氏系統が72~77%と多くを示している。これは昭和12年(1937)から澱粉工場設置が奨励されて、南九州その他の畑作地帯に増加した為である。食用の七福系統は佐賀県が45%と多く、次いで大分県の20%、熊本県の18%であった。

南九州の源氏系統の数値を、昭和11年と比較すれば、却って昭和15年が高くなっている。その理由は明かではないが、調査者が異なっているからであろうか。

全国における品種別作付割合は表3の通りである。

戦前の昭和15年(1940)の育成品種と在来品種の比率は、4対96%で在来品種が主であった。18年(1943)には育成品種と在来品種の比率は18対82%であったが、20年(1945)には品種改良が進み両者が50対50%になった。24年(1949)の比率は72対28%となって育成品種が断然多くなった。在来品種の中では源氏、紅赤などが多く、育成品種の中では護国、沖縄100号、農林1号、農林2号などが多かった。

甘藷の作付面積は、戦前の15年には27万haであった。戦後増加し20年には40万haとなった。その後は一時減少したが、24年には最高

表2 九州地方における主要な在来品種の普及状況（昭和15年、単位%）

品種／県	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県
源 氏	20	30	—	—	—	—	—
蔓 無 源 氏	10	—	—	—	5	—	—
短 蔓 源 氏	—	—	—	3	—	—	45
元 気	23	5	66	—	30	77	30
赤 元 気	—	—	3	—	7	—	—
大分元気1号	—	—	—	—	15	—	—
鹿 児 島	—	—	1	—	—	—	—
薩 摩	—	—	2	—	—	—	—
白 便 利	—	—	—	29	—	—	—
赤 便 利	—	—	—	6	—	—	—
七 福	5	45	—	18	20	—	15
ア メ リ カ	5	—	—	—	—	8	—
そ の 他	37	20	28	44	23	15	10
合 計	100	100	100	100	100	100	100
源氏系統合計	53	35	72	38	57	77	75
七福系統合計	10	45	—	18	20	8	15

（坂井健吉（1970）九州地方の品種の変遷、戦後農業技術発達史3巻、かんしょ作昭和15年の甘藷指定試験打合せ会議資料「甘藷の栽培品種並びに特性に関する調査」）

注）源氏系統：蔓無源氏、短蔓源氏、元気、赤元気、大分元気1号、鹿児島、薩摩、白便利、赤便利などを含む。七福系統：七福、アメリカを含む。

表3 全国における品種別作付割合の変遷（割合%、面積ha）

品種／年次	昭和15年	16	17	18	19	20	21	22	23	24
農 林 1 号	—	—	—	0.1	0.9	2.4	4.8	8.2	9.6	12.1
農 林 2 号	—	—	—	0.2	1.7	9.8	8.8	6.4	7.2	7.9
沖 縄 100 号	3.5	6.0	2.0	4.8	12.3	16.1	19.7	19.9	18.3	16.7
護 国	0.2	0.9	8.0	10.2	12.4	21.8	23.2	23.2	24.6	25.1
育成品種合計	4.1	8.1	12.1	17.9	30.1	49.8	63.1	67.0	68.3	71.5
源 氏	38.4	33.4	32.6	32.2	20.8	14.4	7.9	7.3	5.8	4.8
紅 赤	12.9	10.7	8.8	6.1	3.3	1.4	0.6	0.2	0.4	0.2
太 白	5.0	10.7	12.5	11.2	17.0	12.8	9.6	9.0	8.6	7.7
七 福	8.1	7.9	7.8	6.3	4.3	5.8	2.9	3.3	3.3	1.7
在来品種合計	95.9	91.9	87.9	82.1	69.9	50.2	36.9	33.0	31.7	28.5
合 計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
甘藷作付面積	275525	310842	—	328140	—	403500	—	380930	—	444480

（農林省振興局農産課（1957）最近における甘藷に関する資料、甘藷の作付面積は農林水産省統計情報部（1983）都道府県農業基礎統計（いも類）

備考：育成、在来品種ともに合計は、その他雑品種を含んだ数値である。

VI. 引用文献

1. 鳴門市(1982) 甘藷栽培 鳴門市史 中巻
2. 日本甘藷馬鈴薯株式会社(1948) 西上国蔵「元気種」を発見す(1872～3年)、さつまいも及びじゃがいもの渡来 新生社
3. 徳島県農事試験場(1983) イモ類に関する研究業績 徳島県農試 80年史
4. 農林省農務局編(1937) 雑穀豆類甘藷馬鈴薯耕種要綱 大日本農会
5. 小野田正利(1965) さつまいもの改良と品種の動向 藪類会館
6. 坂井健吉(1999) さつまいも 法政大学出版局
7. 農林省農政局(1943) 源氏 七福 蔓無源氏 甘藷品種図説
8. 長崎県農林センター(1962) 甘藷及び馬鈴薯 長崎県農業試験場史
9. 矢野町(1961) 三徳藷(元気または源氏)、七福藷(メリケン白またはアメリカ藷)矢野町史(矢野町は昭和50年に広島市に編入)
10. 日本甘藷馬鈴薯株式会社(1948) 久保田勇次郎三徳、七福をもたらず、さつまいも及びじゃがいもの渡来 新生社
11. 水野勉(1938) 亜米利加藪舶載の由来と之が品質に就いて 農

の44万haとなった。その後の数値は省略したが、食料事情が好転したので減少に転じた。

業及び園芸 13巻8号

12. 広島県(1980) 移民県広島の位置 広島

県史 近代 1

13. 鹿児島県農事試験場 (1963) 鹿児島県農試業績集創立60周年記念 明治35年～昭和35年
14. 南日本新聞(1964)昭和39年4月16日 くらいも特集27 (39年1月～10月まで72回掲載)
15. 坂井健吉(1970) 九州地方の品種の変遷 戦後農業技術発達史 3巻 日本農業研究所
16. 農林省振興局農産課(1957) 最近における甘藷に関する資料
17. 農林水産省統計情報部 (1983) 都道府県農業基礎統計いも類(明治16～昭和55年)

あとがき

平成14年(2002)11月上旬に調査計画を作成した。まず、広島市、鳴門市、垂水市などの教育委員会に、文書で郷土誌関係の資料や頌徳碑などの写真の送付をお願いした。

広島市の教育委員会の方からは資料はないとの返事であった。14年12月16日の日本経済新聞の文化面に、小生が14年3月に発行した『日本甘藷栽培史』についてのエッセイが掲載された。この縁で、広島市の郷土史研究家の大儀正夫氏と知り合うことができた。この方から、矢野町(現広島市)史の写しや、多くの写真を自ら撮影して送って下さった。鳴門市では既に整っていたのであろうか、間をおかず市史の写しと頌徳碑の写真が送付されて来た。垂水市では教育委員会の方が苦勞の末、蔓無源氏の発見者である中馬磯助氏の曾孫を探し出して下さった。早速、お会いして墓の撮影や、新聞の切り抜きの写しをいただいた。新聞については、さらに南日本新聞社

で内容を確認した。

統計資料は、鹿児島統計事務所、鹿大図書館、鹿児島県庁などで調べたが、甘藷の品種別作付け面積の統計について、大正、昭和初期の記載はなかった。

以上の他、すでに所有していた資料によって執筆した結果、新しく得られた知見は下記の通りである。

1). 元氣(アイノコ)の導入者である西上国蔵氏の来歴について詳細が判明した。この元氣は、明治28年(1895)に導入された源氏(元氣)よりも、早い明治11年(1878)に導入されている。同じ在来品種が別々に導入されたのかも知れないが、その真実は明確ではないと思う。なお、大村藪、横瀬藪(元氣種)などについては、大村市教育委員会や長崎県総合農試などに照会したが、その来歴を明らかにできなかった。氏をたたえる「西上翁頌徳碑」の写真入手し、碑文を解説した。

2). 源氏と七福の導入者である久保田勇次郎氏の来歴について詳細が判明した。氏をたたえる「甘藷の碑」、氏夫妻、久保田家の寄せ墓などの写真入手し、碑文を解説した。氏は明治当時の契約によって、豪州やアメリカに移民されたのであった。

3). 源氏から蔓無源氏を発見された中馬磯助氏の曾孫の方が判明したので、お会いして残留の墓石や寄せ墓の撮影をした。発見の経緯が、昭和39年4月16日の南日本新聞によって明らかにされた。なお垂水市の郷土誌には何らの記載も見られていなかった。

おわりに、多くの資料や写真など送って下さった方々、さらに、碑文を解説頂いた元鹿児島純心女子短期大学教授芳即正氏に対し、心から厚くお礼を申し上げる次第である。